

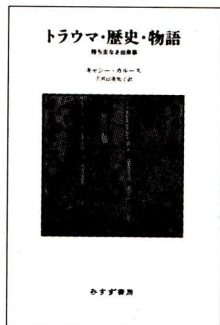
キヤシー・カルース著

『トラウマ・歴史・物語』

——表現されるトラウマの意味

(下河辺美知子訳・みすず書房・二〇〇五年二月)

木股 知史



文学や映画がプロットの中心にトラウマを据えることがあるが、そのことの意味がうまく説明できずに、ずつと気になっている。たとえば、ヒッチコックの映画『マーニー』では、美しい秘書マーニーは金庫破りの

の常習者だが、赤い色や雷鳴を異常におそれている。幼児期に母を守るために殺人を犯したことが明らかにされて謎は解かれる。明らかにトラウマは、謎解きのための道具である。しかし、『サイコ』や『鳥』では、トラウマは緩解せずに放置され、反復される予兆すらただよっている。トラウマが謎解きの道具に使われる場合は簡単だが、トラウマそのものが表現の根柢にかかわるのではないかという問いに導かれることがある。

書評
もしかするとその問いを解いてくれる手がかりが含まれて

いるかもしれないという期待を抱いて、本書を手にとった。本書は反復されるトラウマという視点から、表現される物語としてのトラウマの問題に迫っている。「序文——傷と声」では、どうして忘まわしい体験が繰り返し再現されるのかというトラウマについての「快感原則の彼岸」でのフロイトの関心が出発点におかれている。フロイトが言及するのは、一六世紀のイタリアの詩人トルクアート・タッソの叙事詩『エルサレムの解放』のエピソードである。主人公タンクレディは、敵の甲冑を身につけていた恋人のクロリндаを誤って殺害してしまう。クロリндаを埋葬した後、魔の森に迷い込んだタンクレディは樹木に斬りつけるが、切り口から血が流れ、魂を呪縛されていたクロリндаの声がもれる。カルースは、タッソの叙事詩を「文学と理論との宿命的な絆を示す物語」だととらえ、最初の衝撃の出来事の意味を十分受けとめることができずにいたために、生き延びた後に、別のかたちでそれが反復されることにトラウマの特性を見定めようとする。繰り返されるトラウマの衝撃の意味するもの、またトラウマを語る物語の意味、トラウマの反復における内部の他者性や、歴史の領域への拡大といった問題が考察されることになる。

第二章「文学と記憶の上演」では、映画『ヒロシマ私の恋人』（一九五九年日仏合作、マルグリット・デュラス、アラン・レネ 日本語題名『二十四時間の情事』）が取り上げられる。反戦映画の撮影のために広島を訪れたフランス人女性と、建築家の日本人男性が偶然知り合い、恋におちる。女性は広島へやってきたことで、十四年前に、ドイツ占領下のフラン

スで、あるドイツ人男性と恋愛関係にあったが、狙撃されて男性は死に、自身は地下室に閉じこめられたという体験を想起することになる。彼女は、想起した記憶を男性に語るようにする。「彼 きみはヒロシマで何も見なかった。何も」「彼女私はすべてを見たの。すべてを。」という会話に象徴されるように、二人の間には深いディスコミュニケーションの溝がうがたれている。しかし、カルルスは、裂け目があつてこそつながりが生まれるという理解を示す。彼女の想起は、「自分の死に直面する物語であると同時に、直面することの不可能性を訴える物語である」という二重性のうちに現れるというのである。トラウマをつかみそこねていることによって、つながりあい、「互いの歴史を創造しあう」ことが可能になったと、カルルスは述べている。安易な共感は退けられているが、そのかわりトラウマそのものが、理解不能の溝をまたぐ相互性を生み出す出発点と考えられている。

第一章「持ち主なき経験——トラウマと歴史の可能性」、第三章「トラウマからの／への出発」では、トラウマと歴史の関連がさぐられる。「モーセと一神教」におけるフロイトの所説は、カナン帰還の際に、ヘブライ人たちはモーセを殺害し、そのことが民族全体のトラウマとなり、そのことを隠蔽するために同じモーセという名の指導者を立てるが、一人目のモーセに対する同化が起こり、モーセ教への回帰がユダヤ教を一神教とすることとなった、というものである。ユダヤ教の一神教化は、遅れてきたトラウマ体験だという。フロイトは、そのことを、電車事故にあいその時は何事もなく現場を立ち去

ったが、潜伏期を経た後で、外傷性神経症にかかる事例と対比している。フロイトは潜伏期の共通性に注目したのだが、カルルスは、「離脱」「出立」ということに引き寄せられている。「モーセと一神教」の洞察の中心は、「トラウマ同様、歴史もまた決して一個人のものではありえず、互いのトラウマに巻き込まれるそのかわりあいそのものが歴史となるということ」にあると、カルルスは指摘する。一章と三章に若干の異和を感じたが、それは、歴史的トラウマと個人のトラウマを同列にとらえてよいのだろうか、という疑問である。歴史的なトラウマは、宗教や国家という共同の觀念の発祥にかかわっている。これに対して、事故にあうことによるトラウマは、個人的なものである。民族宗教の発祥にかかわる歴史的トラウマは、個人の心的世界とは倒立した共同幻想に属しているが、フロイトもカルルスもそれを、個人の心的世界に延長できるものとしてとらえている。カルルスは、「離脱」や「出立」の様相の一つとして、ナチスの台頭のもとで、フロイト自身のウィーン脱出をとらえようとし、モーセがユダヤ教に「伝承」というかたちで作用したように、精神分析理論が「伝承」となったと述べる。モーセの一神教は、ユダヤ教に対して、共同的な規範として作用したのだが、精神分析理論は、時代の共同的な規範となったわけではない。カルルスは、不分明な部分が繰り返し問い返されることによって、かえって想像力が刺激されるという逆説がはたらくことによって、精神分析の理論は伝承として生きのびることができたと指摘している。国家や宗教の規範は、個人に持ち主のない体験を強

いるという、共同観念のトラウマを刻印してくるが、それは個としてのトラウマ体験とは異質ではないだろうか。

第五章の「トラウマ的目覚め」では、フロイトの『夢判断』の第七章で語られている父親の夢の理解の多義の様相が検討され、死と直面することによるトラウマの問題が取り上げられている。父親が子どもの病気の看病にあたっているが、子どもは亡くなる。遺体を収めた棺を見ることが出来るように、ドアを開けたまま、隣室で父親は休息する。父親は眠りに落ちるが、次のような夢を見る。子供は、父親のベッドの横に立っていて、彼の腕をつかみ、非難をこめて話しかける。子供は「お父さん、お父さんには僕が燃えているのが見えないの？」と言った。父親が目を覚ますと、棺の番をしていた老人が眠りこんでいて、蝋燭が棺に倒れ落ちたので、経帷子と遺体の片腕が燃えているのに気付く。フロイトはこの夢について、懸念を抱いたまま眠った父親に、火事の光が伝わって、蝋燭が倒れて火事になったことが明瞭に認識されたのだという説明を試みる。子供の言葉は、生前の記憶がよみがえったのだろうという。フロイトは、願望の充足という自らの理論によって、この夢が死んだ子供が生きている姿をもう一度見るといふ父親の願望を満たしていると指摘する。

ただ、フロイトは、早く目覚めないといけないという状況下で夢を見たという矛盾にたちどまろうとする。カールスは、フロイトのこだわりを「現実に対して目を覚ます」という父親の「応答は遅延させられている」点に見定めようとする。死体を認知していないながら、目覚めていることが出来なかった

父親にとつて、この夢は「人間の心理と現実の関係そのものを表したもの」とフロイトによって理解されていると、カールスは指摘する。願望と現実の亀裂があらわになっているというのである。目覚めを促す夢を見続けているという矛盾は残されている。

この夢を物語として理解すれば、私たちはどのような感情をうけとることが出来るだろうか。眠ってしまい、子供の夢によって目覚めた父親は、子供の遺体が燃えていることに気付く。死という取り返しつかない事態は、火事による遺体の損傷という形で繰り返され、父親は深い打撃を受けるだろう。しかし、夢では、子供が生きていた頃の姿で現れたことにより、父親はその感触を心の深みで受けとめたに違いない。取り返しつかない現実についての告知が、慰藉を含んで現れて来るといふ矛盾が、この夢の物語にはつきまとっている。それは、カールスが指摘するように、「外界の暴力的現実と固く結びついていながら、それに対して盲目である」という意識がもたらす感覚である。

カールスは、この夢についてのラカンの読み直しを対置する。ラカンは、夢によって目覚めさせられるという逆説的な事態に注目する。子供の死に直面するという父親のトラウマ体験の再現をこの夢は含んでおり、子供の死と出会い損なったことがまさにトラウマとして反復されているのだとされる。死という突然の重大な出来事に出会って意識は十分に対応できないということがフロイトのトラウマ概念の出発点であるが、ラカンは、夢による目覚めに応答のかたちを読みとろう

とする。筆者は、フロイトやラカンの夢の解釈の方法に、文学批評と同様のモチーフを感じとる。

文学批評の言葉で言うなら、この夢の理解には、視点の相互性という観点の導入が必要なのである。フロイトは、父親の眠りと夢に、死に直面できないでいる父親の意識の物語を読みとる。ラカンは、夢の中で子供の呼びかけに対する応答が父の目覚めであり、その目覚めに、トラウマによって結びつけられた父子の物語を読みとろうとしている。ただ、その応答は、不可能性の刻印を押されている。暴力的な現実にとらわれているという事態を変えることはできないが、不可能と知って、意識は応答を返すのである。意識の多層的なふるまいは、現実の暴力性の前で人をかろうじて踏みとどまらせる。ラカンの読解で重視されているのは子供の言葉であり、それは、カールスによれば、「父親のものでも子供のものでもなく、行為として伝達されるものであり、自己を目覚めさせるのではなく、その目覚めを他者へ伝達するものなのだ」というように理解される。トラウマは悪夢の「反復なのではなく、「目覚め」を他者に伝達するという倫理的要請を含むものとして、とらえられているのである。このカールスの理解は、ラカンの読解を一步進めたところにあらわれている。まず、フロイトによって父親の意識の物語が読みとられ、ラカンは、子供の呼びかけと父の応答という相互性を重視し、カールスは、さらに一步を進めて、他者に向けられた呼びかけを見出そうとしている。

カールスの把握は、ある意味で、文学の本質を言い当てて

いるようにも感じられる。文学や映画は、なぜ、子を喪った父親の夢の事例と同様の過酷な運命を描こうとするのだろうか。現実の悲惨を模して、私たちが恐怖のもとにひざまづかせ敬虔な従順さに置きとどめるためではない。変更できない現実の前で、うちひしがれた無力をうったえるためでもない。描かれた過酷な運命としてのトラウマを、反復し、読みかえ、目覚めと出立の起点として転置するために、文学や物語は存在しているのである。

(きまた さとし・近代日本文学)